

韓国「国史」教科書の日本像と 韓国人学生の日本イメージ

岩井 朝乃・朴 志仙・加賀美 常美代・守谷 智美

要 旨

本稿では、韓国の国史教科書の日本像に関する研究結果のレビューから、韓国人の「日本観の原型」を探り、韓国人学生に対する日本イメージ調査の先行研究の結果と合わせて検討した。その結果、1)韓国の国史教科書に現れる日本像の特徴は、「侵略者」「文化後進国」に集約される、2)韓国の学生の抱く日本イメージには、肯定、否定、中立の混在、過去と現在の混在が見られ、アンビバレンスである、3)韓国の学生の日本イメージの否定的な側面と国史教科書に現れる侵略者としての日本像には強い近似性がある、4)韓国の学生の日本イメージの肯定的側面、中立的側面には、現代日本や時間的変化の表れにくい特徴が見られる、の4点が明らかになった。

【キーワード】韓国、国史教科書、日本像、日本イメージ、韓国人学生

1. はじめに

文化的背景の異なる学習者の教育に携わる上で、彼らが抱く日本イメージを理解することは、学習者の個々の特質を理解するために欠かせない。学生たちは、自国と日本との関係性の中で培われる社会的な文脈の下で日本との関わりを持っているからである。学習者の属す社会に存在する日本像は、国内、海外を問わず、日本語教育の現場に影響を与えている。その一例に、加賀美(2007)の調査では、日本語教育場面での葛藤として、アジア系留学生が日本人教師に対して日本の戦争責任を問いたすという事例を報告している。この事例から、日本とアジア諸国間の歴史認識の問題が、アジア系留学生と日本人との関係形成上のリスク要因となっていることがうかがえる。これからの日本語教育や異文化間の教育的交流促進には、日本と各国の関係を包括的に捉え、危機的側面をも理解した上で個々の学生に対応する必要性が高まっていくだろう。

本稿では、各国の日本イメージを探る第一歩として、日本語学習者が世界で最も多く、在日留学生の14.60%(17,274人)(2007年現在 日本学生支援機構)を占める韓国を取り上げる。日韓は歴史的に深い関係を持っており、現在も相互の往来が盛んで、2006年には日本を訪れた韓国人、韓国を訪れた日本人はともに200万人を超えている(2006年現在 国際観光振興機構)。しかし、人的交流が緊密化す

る一方で、韓国人の人々の日本に対するまなざしは依然として厳しい。読売新聞・韓国日報の共同世論調査(1995、2005、2006)では、日本を「自国の経済にとって大切な国」とする人が29.6%(95年)から89.1%(06年)に増えたものの、日本に対して「悪い」印象を持つ人は67.3%(95年)から88.3%(05年)、82.1%(06年)と増加している。その主な原因として挙げられているのは日韓の歴史認識問題、領土問題である。

韓国人の日本観は、肯定と否定の混在するアンビバレンスな状態であると言われているが(鄭大均1997)、根強い否定的認識の底には日韓の過去の歴史があり、その歴史が現在どのように教えられているかが深く関連している。鄭在貞(1997)は、韓国の歴史教育は「韓国人の日本観を規定するもっとも重要な情報源」であり、「『国史』教科書に書かれた日本像を探ることは韓国人の日本観の原型を理解するもっとも有効な手がかり」になると述べている。韓国人の抱く日本イメージを理解する上では、まず韓国の国史教科書に日本がどのように描かれているかを知ることが必要である。同時に、歴史教育を受けた学生たちの日本イメージに、国史教科書の日本像がどの程度、どのような形で反映されているかを把握することにより、より現実的な理解を進めることができるだろう。

本稿では、まず、韓国の国史教科書の日本像に

関する研究のレビューを行い、韓国人の抱く「日本観の原型」を探る。次に、韓国の学生を対象とした日本イメージ調査の結果と合わせて検討し、韓国人が学校教育を通して継承する日本像が、実際に学生が持つ日本イメージにどのように反映されているのかを検討する。

2. 「国史」教科書の日本像

まず、韓国の歴史教育課程の特徴と教科書制度について述べる。次に、韓国の国史教科書の日本に関連する記述を分析した研究を概観し、その特徴を述べる。先行研究選定に関しては、日本人と韓国人の共同研究者が検討し、著しい主観性が見られるものは除外して、データとして客観性があると判断したものを取り上げた。

2.1 韓国の歴史教育

韓国では、日本の学習指導要領に当たるものを「教育課程」と呼ぶ。第1次教育課程(1954-63)、第2次教育課程(1963-73)、第3次教育課程(1973-1981)、第4次教育課程(1981-1987)、第5次教育課程(1987-1992)、第6次教育課程(1992-1997)、第7次教育課程(1997-現在)の7つの時期があり、教育課程の改定にともなって教科書もその都度改訂されている(青野 2004; 稿末資料参照)。韓国の中学校・高等学校では、歴史を国史と世界史に分けて教えているが、世界史が選択科目であるのに対し、国史は第1次から第7次まで継続して必修科目であり、独立した教科書が使われている(鄭在貞 2002)¹。また教科書は第一種と第二種に分かれており、「国定教科書」は第一種教科書を、「検定教科書」は第二種を指す²。国史は第1次、第2次教育課程までは検定教科書だったが、朴正熙政権下で「国籍のある教育」が標榜され、第3次以降「国策科目」という名目で重要視されるようになり、第一種の国定教科書に変わった(鄭在貞 1998a)。これは、第3次以降韓国の国史教科書は一教育課程に一種類しか存在せず、同一課程で学ぶ全ての学生が同じ教科書を使うことを意味している。従って、国史教科書に現れる日本像は、韓国人学生全体に共有される基本的な日本イメージになると考えられる。

韓国の歴史教育は、国史教育の強化とそれともなう世界史の相対的弱体化が一つの特徴とされており、世界史と自国史を関連付ける視点が育ちにくいと言われている(尹世哲 1992)。韓国の国史は日本に

強いられた植民地史観を克服するための国難克服史であり、民族史観の確立が国史教育の主要課題とされている。このため「歴史を通して民族と国家のアイデンティティを確認しなければならない(尹世哲 1992)」という民族主義的性向が存在するという。韓国の歴史教育において、国史は国家と民族の歴史として捉えられており、国史を学ぶことで国民アイデンティティと民族アイデンティティを涵養する意図があるものと思われる³。

2.2 国史教科書における日本の割合とイメージ

2.1で述べた韓国の歴史教育の性格上、国史教科書に現れる日本像は、民族意識や国民意識と関連付けて学習される可能性が高い。以下では、各国の歴史教科書に現れる日本関連記述の国際比較研究から、韓国の国史教科書における日本関連記述の割合と、日本イメージを見る。

韓国の国史教科書に日本関連記述が占める割合は、他国に比べて高い。日本関連記述の占める割合を日本に対する関心と捉え、欧米、アジア、南米など22カ国の歴史教科書の内容分析を行った渡辺(1987)の調査によると、日本関連記述が全体に占める比率は22カ国平均1.73%なのに対し、韓国の教科書の日本比率は14.00%で、22カ国のうち最も高かった。教科書で言及される外国の数と日本の相対的比重では、22カ国の平均は0.79だが、韓国の国史教科書での日本の相対的比重は3.36であり、やはり22カ国中最も高い。22カ国の全体的な傾向としては、日本に関して言及される全項目中、軍事戦争の項目が5割(政治外交9、軍事戦争13、経済1、社会文化4)を占めており、太平洋戦争を中心に20世紀への集中が見られる(17世紀以前6、19世紀4、20世紀17)。韓国の場合、日韓史に関連する事項を中心に古代から近代まで記述され(17世紀以前3、19世紀4、20世紀9)、秀吉の朝鮮出兵(以下、韓国の用語に合わせ壬辰倭乱とする)と近代の日本による朝鮮支配(以下、植民地支配)では、韓国国史教科書に現れる日本関連記述全項目の平均行数以上の記述が見られる。目次にも日本が登場することから韓国史における日本の重要度は非常に高いといえる⁴。一方、この教科書には戦後の日本に関する記述がないことも特徴である。

次に、日本が各国の歴史教科書の中でどのようなイメージで描かれているのかを見る。伊藤(1987)は、東アジア、欧米など10カ国11種類の中学歴史

教科書に見られる自国イメージと他国イメージを調べ、どの国の教科書も自国に対しては概ね愛国的であり(平均 21.7)、日本に関する記述は太平洋戦争などの記述の割合からやや非好意的である(平均 -2.58)という結果を得ている。韓国の国史教科書の場合は、自国に対する好意度は+82.36 で 10 カ国中最も愛国度が高く、日本に対する評価は-18.06 で最も非好意的であった。伊藤によると、日本に対する記述の多くは壬辰倭乱、植民地支配の箇所に現れており、愛国的表現は「豊臣秀吉軍との闘い」「反日独立闘争」「朝鮮動乱」「現在の韓国」に多いという。このうち「豊臣秀吉軍との戦い」「反日独立戦争」は日本との戦いであるため、日本への非好意的な表現と自国に対する好意的な表現は密接に関わっていると思われる。

先述した渡辺(1987)の調査では、日本の武力行使の直接的相手国では該当事項に対する記述量が多く、「敵」「侵略者」「帝国主義者」「抗日」などの表現とともに軍事大国としての否定的側面が強調されることが指摘されているが、韓国の国史教科書にこの傾向は顕著である。伊藤(1987)が述べているように「日本はいわば『悪役』『反面教師』であり彼らの歴史観を支える重要な素材となっている」といえる。

以上は 1980 年代の調査であるが、各国教科書に占める近隣諸地域についての記述を行数で求めた中村(1995)の調査によると、韓国国史教科書に占める日本の叙述量は古代・中世 2.5%、近世 9.6%、近代 11.3%で、計 8.1%であった。後年行われた同様の調査(中村 2004)では、古代・中世 0.8%、近世 0.7%、近・現代 2.0%で計 1.2%と日本に関する叙述量の割合が減っている。これは自国史の割合が 90%以上と大幅に高まった影響であると思われる。しかし、1996 年発行の教科書での時代別の叙述比重では李朝時代 31%、開港期 15%、植民地 15%と近世と近代が重視されており(朴ソプ 2004)、各時代に深く関連する日本が重要な素材として現れることに変わりはない。植民地時代の叙述量が 96 年発行教科書で最多となっていることから、韓国国史教科書における日本関連記述の大まかな傾向は変わってないと言えよう。

2.3 日本に関連する記述分析

韓国国史教科書の日本像は、具体的にどのような記述されているのだろうか。韓国の国史教科書に表れる日本に関する記述分析の研究結果は、「侵略

者」と「文化後進国」という姿に集約できる。

以下では、第 6 次、第 7 次教育課程の国史教科書を対象とした日本記述研究から浮かび上がる日本像を示す。

① 侵略者

国史教科書における中世以降の日本は、中世の倭寇、近世の倭軍、近代の日本軍と、侵略者として連続的に描かれている。

日本に関連して侵略、略奪という言葉が現れるのは、倭寇に関する記述からである。「日本=倭寇=海賊(玄明喆 2000)」という構図があり、「倭寇は日本の対馬を根拠地とする海賊で、海岸地方に侵入して略奪をはたらいていた(略)崔茂宣は火炮を使用して倭寇を撃退するのに大きな功を立てた。ついで、朴葢は戦艦 100 隻を率いて倭寇の巢窟である対馬を征伐して、その氣勢をそいだ(第 7 次中学)」のように、倭寇の略奪に対する「征伐」というトーンで一貫している。

近世におきた壬辰倭乱は、目次にも「倭乱」として日本が登場し、「倭軍の侵入」「水軍と義兵の活躍」「倭乱の克服」「倭乱の結果」(第 7 次中学)と項目を立てて詳しく学習される。日本は侵略者として大きく取り扱われ、韓国が受けた被害を記述した部分では「壬辰倭乱は国内外に多くの変化をもたらした。国内的には倭軍によって数多くの人命が殺傷されたばかりか、飢饉と疾病によって人口がかなり減少した。(中略)また倭軍の略奪と放火によって仏国寺、書籍、『実録』など数多くの文化財が損失し、数万人が日本に捕虜として捕まった」(第 7 次中学)のように書かれている。この時に日本を撃退した李舜臣は現在も韓国の国民的英雄である。

近代以降も、日本及び日本人は侵略的国家、国民として現れる。近現代に割られる分量は多く、日本による植民地支配とそれに対する抵抗の記述は詳細である。

近代に関する教科書の記述分析研究では、朴振東(2000)による 1996 年高等学校国史教科書(第 6 次教育課程)の植民地時代における支配政策史に関する記述分析がある。「Ⅲ. 民族の独立運動」の「2. 民族の試練」を分析した結果、日本に関して「奸悪で狡猾な」「熾烈な」「狂奔した」などの激しい修飾語が多く、価値介入的、かつ断定的な表現の多用が見られるとしている。また、該当部分 48 段落(10 ページ分)で、「日帝」が 49 回、それ以外の日本を

表す主語概念が 41 回現れたこと、一方韓国側の主語概念は 14 回で「強いられた」「犠牲となった」など受動的に記述されていたことを述べ、その記述構造は「日本は加害者(=能動)」「韓国は被害者(=受動)」であることを刻印する装置だとしている。

近代の日本関連記述は量が膨大であるため、項目と分量について君島(2003)の第 7 次教育課程の国史教科書分析より特徴的な部分を抜粋する。まず、中学教科書では植民地時代を指す時代区分に「日帝強占期⁵⁾」(第 7 次中学)と日本による侵略が示されている。植民地時代の項目では「IX. 民族独立運動」の章の第一節「民族の試練(p254-263)」に「1. 日帝の憲兵警察統治の実情は?」「2. 日帝の経済収奪政策は?」「3. わが民族が民族抹殺統治下で経験した苦難は?」のように日本による侵略が政治、経済、文化の各側面で進んだことが 10 ページにわたって説明されている。更に民族独立運動については「2. 三・一独立運動」(9 ページ)「3. 独立運動の展開」(9 ページ)「4. 国内の民族運動」(10 ページ)と 30 ページを費やしており、独立運動に力点をおいた記述となっている。

第 7 次高校教科書では政治の節の「近現代の政治変動」に「1. 開化と自主運動」「2. 主権守護運動の展開」「3. 民族の試練と抗日独立運動」があり、植民地時代の記述が見られる。「3. 民族の試練と抗日独立運動」では「国権の被奪と民族の試練」(1.5 ページ)「三・一運動」(1.5 ページ)「大韓民国臨時政府」(1 ページ)「国内の抗日運動」(1 ページ)「抗日独立戦争の展開」(2 ページ)という構成で、本文の他に「日本軍慰安婦の実情」「日帝の三・一運動弾圧」「武装独立軍の対日抗戦」などが資料として載っている。中高ともに、被侵略の過程と独立運動が詳しく記述され、学生が自国の立場に立って学ぶ工夫が随所に凝らされている(君島 2003)。また、用語として「独立運動」だけでなく「抗日独立運動」「独立戦争」が使われており、侵略者日本に対する抵抗と戦争というニュアンスが読み取れる。

以上、近世から近代に至るまで日本は一貫して「侵略者」としての姿を保持し、その記述分量と詳細さは近代に近づくにつれ大幅に増加している。勉強熱心であればあるほど、日本の侵略とそれに対する抵抗の歴史が学生の脳裏に鮮烈な記憶として残るだろうことは想像に難くない。

② 文化後進国

文化の伝播と交流に関する記述では、日本は「文化後進国」として描かれている。古代の文化伝播、壬辰倭乱の文化財略奪による日本文化の発展、江戸時代の朝鮮通信使に関して表れるもので、古代から近世まで朝鮮は常に日本に教え、与えてきたとする施恵論に基づく日本観を示しているとされている(高本 1995; 李宇泰 2000; 石渡 2002)。

古代では、政治・経済・文化のあらゆる面で後進的であった日本に朝鮮が様々な恩恵を施したという観点から、朝鮮の文化的優越性を強調する傾向が指摘されている(高本 1995; 李宇泰 2000)。「新しい文物を持って日本に渡ったわが国の人たちは古代の日本人を教化した」(第 6 次高等学校)という表現が特徴的である。「三国時代にわが国の流移民が日本列島に渡って、先進技術と文化を伝え、大和政権を誕生させ、日本古代の飛鳥文化を成立させるのに貢献した」(第 6 次高等学校)など、朝鮮が日本人を「教化」し、日本の政権や文化の基礎を直接作ったように読める⁶⁾。一方、石渡(2002)は、中国から韓国が受けた影響については自律的受容論を展開しており、文化伝播に対する解釈が一貫していないと述べている。

中世では、壬辰倭乱の際「多くの文化財が日本に略奪」された結果、「朝鮮からいろいろな文化財や先進文物が日本に伝わり、日本の文化発展に寄与した」(第 7 次中学)「日本は朝鮮から活字、絵、書籍などを略奪し、性理学者⁷⁾や優秀な活字工および陶磁器の技術者などを捕虜として捕まえ、日本の朱子学や陶磁器文化が発達することのできる土台を整えた」(第 7 次高校 1 年)のように、朝鮮は与え日本は略奪するという図式が示され、朝鮮文化は日本文化発展の基礎であることが確認されている。

壬辰倭乱後の朝鮮通信使は「日本は通信使の一行を通して先進学問と技術を学ぼうと懸命であった。したがって、通信使は外交使節としてだけではなく、朝鮮の先進文化を日本に伝播する役割も果たした」(第 6 次高等学校)と、日本に進んだ文化を伝える役目を担うものとして書かれている。第 6 次国史教科書の近世日韓関係史を分析した玄明喆(2000)は、教科書の叙述では「朝鮮=文化先進国」というカテゴリーが固守されていると述べている。

以上のように、古代から近世にかけての日本は、朝鮮の先進文物を受け入れて学ぶ「生徒(伊藤 1987)」として描かれている。ここには日本が自主

的に外来文化を受け入れ、消化して独自のものへと発展させていったという視点は見当たらない。

複数の研究で既に指摘されているように、韓国から多くを与えられた文化後進国という日本像は、侵略者としての姿と関連づけられ、「恩を仇で返す国」という印象を与える可能性が高いと言えよう(伊藤 1987; 高本 1995; 石渡 2002)。朝鮮は文化的に停滞しているという植民地史観を日本に押しつけられて侵略されたという歴史的経緯から、文化後進国としての日本像を描くことで、本来は朝鮮の方が文化的に優れていたと強調し、自国に対する自尊心と自負心を養う意図があると解釈することができる。

もう一点特筆すべき特徴は、上述した「侵略者」「後進国」以外の日本の姿は国史教科書にほとんど記述されないという点である。特に、1945 年以降の日本に関する記述の少なさが目立つ。第 5 次までは戦後の日本に関する記述自体がなかった。第 6 次、第 7 次教科書では、日韓国交正常化について「長い間の課題であった日本との関係を改善し、韓日協定に調印した(1965 年)(第 6 次中学教科書)」「日本との国交正常化のために韓日会談を推進したが、これは市民と大学生の対日屈辱外交反対にあい、いわゆる 6・3 示威を誘発した(1964 年)(第 7 次高校 1 年教科書)」と簡単に触れているが、詳しい経緯や協定の内容に関する記述はなく、韓国の復興を支えた「外国の資本」の主要な出資元の一つが日本であることは示されていない。

近代における「侵略者」としての日本の扱いが圧倒的に多いことから、現代の日本及び韓日関係に関する記述の欠落は、韓国人の対日歴史認識において戦前と戦後の日本の区別をしえない知識不足を招き、日本に対する不信と警戒心のみが強まってしまっているのではないかという憂慮が示されている(石渡 2002; 鄭在貞 1997)。

3. 韓国人学生の日本イメージ

国史教科書の日本像は、韓国人学生の抱く日本イメージにどの程度、どのような形で反映されるのだろうか。以下では、1982 年から 2008 年の韓国人学生の日本イメージ調査の結果を比較検討する。取り上げる研究は、岩男・萩原(1982)のソウルの大学生対象の SD 法によるイメージ調査、日韓相互理解研究会(1992)のソウルと地方の小・中・高・大学生対象の日韓関係史の歴史認識と歴史的日本イメージの

質問紙調査、玄大松(2005)のソウルの大学生対象の自由連想記述による日本イメージ調査、加賀美ら(2008)の地方都市の小・中・高・大学生対象の描画による日本イメージ調査である。調査結果は比較表に一覧としてまとめた(表 1 参照)。調査方法が異なるので単純な比較は困難だが、いずれの調査も学生を対象としているため、歴史教育の影響が比較的現れやすいと思われる。

3.1 侵略者イメージ

1980 年代から現在まで、韓国人学生の日本イメージには否定的イメージが一定の割合で存在し、その大きな部分を占めるのは侵略者イメージである。岩男・萩原(1982)では、日本が 16 カ国中最も「嫌いな」国であり、アメリカ人、韓国人、日本人を 13 項目で評価する調査では、親和性、信頼性ともに日本人が最低である。被侵略の歴史と「恩を仇で返す」日本イメージが親和性と信頼性の低さとして表れたと解釈することができよう。日韓相互理解研究会(1992)でも、「日本が嫌い」という学生が 47.36%でほぼ半数を占める。また日本の侵略性が「強い」とした学生が 94.61%と圧倒的に高い。玄大松(2005)では植民地支配、歴史認識、戦争に関するイメージが全体の 33.7%と三分の一を超え、蔑視的・憎悪的表現も 14.7%に及んでいる。加賀美ら(2008)の調査でも同様の傾向が見られ、「歴史認識・領土問題」「戦争・植民地支配」「反日感情」が全体に占める割合は 25.4%で、否定的イメージの内 88%に上る。このことから、20 年前から現在まで、日本の否定的イメージは保持されており、その中身は国史教科書に頻繁に登場する侵略者イメージ中心であることが分かる。

なお日韓相互理解研究会(1992)の調査では、日本の国名や政治体制に関して戦前と戦後の混同が見られたという。鄭在貞(1998b)が指摘するように、国史教科書に近代までの歴史は詳細で量も多いのに対し、戦後の日本に関する情報量が圧倒的に少ないことが影響しているのではないと思われる。

3.2 文化後進国イメージ

国史教科書には文化後進的な日本イメージが描かれていた。調査の結果でこれに該当するのは日韓相互理解研究会(1992)の日本は「外来文化の摂取能力」は「高い」(74.25%)が、「文化の創造性」は弱く(53.0%)、「文化の水準」(大学生のみ)は「普通」(44.19%)或いは「低い」(39.24%)という結果である。

表 1. 韓国学生への日本イメージ調査の比較一覧

研究	調査時期	対象	方法	結果
岩男・萩原(1982)	1978 年	ソウルの大学生 556 名 (男 473, 女 83) 日本に関する基礎 知識 4.81(5 が 全問正解)	質問紙調査 SD 法 (16 カ国の好 悪)	評価が高い項目 勤勉性(diligent, competitive, studious) 先進性の一項目(achievement-oriented) 評価が低い項目 親和性(warm, friendly, kind, unprejudiced) 信頼性の二項目(reliable, honest) 先進性の一項目(sexual equality) 総合イメージ「勤勉で能力が高く、能力主義で考え方も古くはないが親しみにくく信頼できない」 勤勉性が 16 か国中最高、親和性と信頼性は最低
日韓相互理解研究会 (1992)	1991 年 5 月～8 月	ソウル、大邱、清州の小・中・高・大学生 3187 名 外国訪問体験有 3.3%、在韓日本人との交流経験有 9.1%、日本語学習経験有 12.9%	質問紙調査 日本の歴史的イメージ (高・大学生のみ)	侵略性「強い」94.61%「経済観念」強い 88.93%「民族意識」強い 74.62%「団結心」強い 78.62%「外来文化の摂取能力」高い 74.25%「民族的主体性」(大のみ)強い 41.57% 「文化の創造性」弱い 53.0%「文化の水準」(大のみ)普通 44.19%低い 39.24% 「科学・技術」のみ関心有
玄大松(2005)	2001 年 5 月～6 月	ソウルの大学生 1183 名 (男 840, 女 343) 日本訪問経験有 11.8%、日本の大衆文化体験有 96.5%、日本人友人有 18.3%	質問紙調査 日本に関する連想記述	日本イメージ表現上位 10 位 ①蔑視的表現 11.7%、②植民地支配 11.0%、③経済大国 10.4%、④大衆文化 5.6%、⑤歴史認識 5.4%、⑥賞賛 5.0%、⑦憎悪的表現 3.0%、⑧戦争 2.6%、⑨独島 2.1%、⑩開放的 1.3% 「国家・民族」「集団・集合」「個人」の三層構造
加賀美ら(2008)	2006 年 9 月	地方都市 (人口 1000 万人規模)の小・中・高・大学生 430 名	9 分割統合 絵画法 (3438 例) KJ 法	中立イメージ 48%「生活環境」(476)「自然環境」(437)「伝統文化」(311)「日本の象徴」(116)「日韓の接点」(111)「スポーツ」(82) 否定イメージ 29%「歴史認識・領土問題」(431)「戦争・植民地支配」(297)「反日感情」(156)「社会的風潮」(119) 肯定イメージ 18%「日本の大衆文化」(445)「先進国」(160)「秩序・親近感」(27)

また、玄大松(2005)の「蔑視的表現」(11.7%)、加賀美ら(2008)の「反日感情」(156 例)の中の蔑視イメージに、日本は文化的に低俗であるというイメージが含まれている可能性がある。しかし、調査で使われた「文化」という言葉がどの時代を指すのか明確でなく、「侵略者イメージ」に比べ定着しているとは言いがたい。「文化後進国」イメージはそれ自体が独立して存在するというより、侵略者イメージに付随して喚起され、蔑視的イメージにつながると考えることができるのではないだろうか。

3.3 日本イメージの多面性

2 節で、韓国の国史教科書には「侵略者」「文化後進国」以外の日本の記述がほとんどないと述べた。しかし調査の結果では、学生たちの日本イメージはより複雑であり、過去と現在、否定、肯定、中立の混在する多面的な様相を示している。

先進国、経済大国としての日本イメージは全ての調査に表れている。岩男・萩原(1982)の調査は、日本人の勤勉性や先進性の評価が高い。日韓相互理

解研究会(1992)では、日本の「経済観念」が「強い」とした学生が 88.93%おり、日本に関心のある分野は「科学・技術」であった。玄大松(2005)では「経済大国」が 10.4%、加賀美ら(2008)では「先進国」(160 例)が全体で 4.59%、大学生では 9.63%である。先進国、経済大国としての現代日本イメージは一定程度定着していると言えよう。岩男・萩原(1982)が指摘しているように、先進的なイメージがあるからといって必ずしも親和性や信頼性が高まるわけではないが、日本は現実的な先進国モデルとして認知されているようである。

調査項目が異なる部分は年代別の比較が困難だが、「大衆文化」が玄大松(2005)で 5.6%、加賀美ら(2008)では 12.79%(大学生 10.28%)現れている。1998 年 10 月から日本の大衆文化が段階的に開放されてきたことや、インターネットの普及によって日本の大衆文化へのアクセスが自由にできる世代が対象であることなどが影響していると思われる。また少数だが「賞賛」(5.0%)(玄大松 2005)、「秩序・親

近感」(0.78%)(加賀美ら 2008)のような積極的な肯定イメージも存在する。

更に、加賀美ら(2008)の調査では、中立的なイメージが全体の 48%を占めるという結果が出ており、その内訳は「自然環境」「生活環境」「伝統文化」「日本の象徴」「日韓の接点」「スポーツ」など、時間的変化の表れにくい日本の特徴や、現代日本と韓国の関係に関わるものであった。肯定、否定、中立イメージの割合は玄大松(2005)と加賀美ら(2008)では異なっているが、これは自由連想記述と描画という調査方法の違いが影響していると考えられる⁸。

韓国人学生の日本イメージには、否定的側面だけでなく、現代日本イメージや肯定イメージ、中立イメージも含まれていた。これは国史教科書の日本像には現れない側面である。日韓相互理解研究会(1992)、玄大松(2004)の調査では、日本イメージの情報源として教師や教科書の他に、マスメディアが大きな役割を果たしていることが示されている。韓国人学生の日本イメージの多面性は、彼らの日本イメージが教科書のみに規定されるわけではないことを示している。

一方で、否定イメージと教科書の日本像に近似性があることも明確に示された。小・中・高・大学生のイメージ形成過程に着目した加賀美ら(2008)は、小学生と中学生以降の日本イメージには異なった傾向があると述べている。小学校から否定的イメージは 20%存在し「歴史認識・領土問題」「戦争・植民地支配」「反日感情」が出現するが、その割合は中学生で 35%と急増し、高校以降定着するという。また小学生の否定的イメージは戦争など漠然としたものが多いのに対し、中学生以降、壬申倭乱や日帝強占期などの具体的な名称が現れるという。教育段階が進み国史教育の内容が詳細になるにつれて、日本の否定的イメージが増加し、具体化することが示唆されている。

これらの研究結果に共通する特徴として、韓国人学生の日本イメージには肯定、否定、中立が混在し、アンビバレンスの様相を呈していると言える。否定的イメージは「侵略者」と関連するものがほとんどであり、国史教科書の日本像との間に強い近似性がある。一方で、「先進国」「経済大国」「大衆文化」など現代日本のイメージや中立イメージ、肯定イメージもある。以上から、韓国人学生の日本イメージには肯定、否定、中立の混在と、過去と現在の

混在、更に否定的イメージと過去の日本像とに類似性が認められることが分かった。

このような傾向は、日本は「嫌い」だが、友好的な日韓関係の強化を望み、機会があれば日本に行きたいと希望する学生が相当数いること(日韓相互理解研究会 1992)や、「日本国家」との社会的距離は遠いが「日本人個人」との社会的距離は近く、「国家としての日本イメージ」は警戒すべきだが(32.4%)見習うべきでもある(33.10%)(玄大松 2005)というアンビバレンスな日本観を反映した結果だといえる。

4. まとめと今後の課題

本稿では、韓国の国史教科書に現れる日本像を整理し、韓国の学生のもつ日本イメージと比較して説明を試みた。明らかになったことは、以下の通りである。

- 1) 韓国の国史教科書に現れる日本像の特徴は、「侵略者」「文化後進国」に集約される。
- 2) 韓国の学生の抱く日本イメージには、肯定、否定、中立の混在、過去と現在の混在が見られ、アンビバレンスである。
- 3) 韓国の学生の日本イメージの否定的な側面と国史教科書に現れる侵略者としての日本像には強い近似性がある。
- 4) 韓国の学生の日本イメージの肯定的側面、中立的側面には、現代日本や時間的変化の表れにくい特徴が見られる。

国史教科書の日本像は、古代から近代までのつながりを保ちつつ、比較的単純なイメージをもって描かれていた。「侵略者」「文化的後進国」としての日本像は韓国人学生の日本イメージの否定的側面に合致するものであった。このことから、国史教科書の日本像が学生たちの日本イメージ形成に重要な役割を果たしていることが推測される。彼らが日本に対し否定的認識を抱く際には、侵略者や文化後進国のイメージが喚起される可能性は否定できない。

一方、韓国人学生の日本イメージには国史教科書には現れない多面性が見られた。現代日本の特徴や中立、肯定イメージは、教科書以外の場から得たものと思われる。磯崎(1997)は、記憶の継承、再生産は個人、公共、公的な場の三つの領域で行われ、

家庭での私的な語り伝え、マスメディア、国定教科書がその装置として使われると述べている。本稿では公的なストーリーとしての国史教科書を分析対象に選んだが、マスメディアや私的な語りの役割も大きいことが予測される。日本の大衆文化やインターネット、実際の交流体験の影響もあろう。日本に対する否定的な視線をもちつつも、今後の日韓関係には友好的な関係を望むといった調査結果には、未来志向的な関係を築こうとする姿勢が見られる。

侵略、植民地支配という歴史的経緯があり、現在の韓国の国史が「日本によって強いられ、民族の受難」の中で、戦いながら発展していく民族史」(鄭在貞 1998a)である以上、加害者としての日本が国史教科書に描かれるのはやむをえない。だが、日韓両国の歴史教科書をめぐる状況は変わりつつある。鄭在貞(1992)は、21世紀の歴史教育に必要なのは「国際理解のための歴史教育」であり、「国際関係の多様な側面を弾力的に理解することによって、国家観の相互協力を増進しうる方法を模索するのに役立つ」という。現在は日韓の歴史学者の共同作業によって、加害者と被害者という関係のみに規定されない日韓共通教材の開発が行われている(君島 2002)。

国家間の不幸な歴史と歴史認識の違いは、異文化間での人間関係に摩擦を引き起こすリスク要因である。しかし、歴史認識をめぐる対話を単なる葛藤要因とするのではなく、共通の知識を増やし相手の認識を理解しようと努めることが必要である。本稿で行った韓国の国史教科書に現れる日本像と韓国人学生の日本イメージの比較検討は、ナイーブな期待や知識不足に基づく誤解を排し、韓国人学生の背景を理解する第一歩である。多面的な日本イメージと現代と過去の混在は、韓国人学生の日本観の複雑さを示している。留学生教育や日本語教育の現場では、彼らの抱くアンビバレンスを知り、韓国の社会背景を理解した上で個別に対応することが肝要であろう。

今回は、国史教科書に対象を絞ったために、日本イメージに影響を及ぼしうる他の要因については検討できなかった。マスメディアの影響に関しては、別途行った量的調査の結果とともに検討する予定である。また、今後、国語教科書、道徳教科書に現れる日本像の分析も進めていきたい。韓国人学生の日本イメージとその形成要因を多角的に解明することによって、より深く学習者を理解し、異文化間教育

プログラム開発への貢献を目指したい。

注

1. 第7次教育課程から、高校1年生で前近代史までの国史を必修として第一種教科書で学び、2、3年生で近現代史を選択科目として第二種教科書で学ぶ構成になった。(鄭在貞 2002)。
2. 一種図書は、日本の文部科学省にあたる教育人的資源部が選定した教科書編纂委員会が執筆する。委員には民間学者と教師らが委属される(鄭在貞 2002)。
3. 国家と民族が同一視される背景には、韓国は元来極めて民族的同質性の高い国家であるという特徴がある。現在、韓国在住の外国人は全人口の2%(1,066,273人)を占めるが、そのうち永住者は16,460人に過ぎない(2007年現在、出入国・外国人政策本部)。
4. 教科書の目次に登場する国は中国、日本、モンゴルである。2002年の中学教科書では「V. 朝鮮の成立と発展」の「3. 倭乱と胡乱」、「VIII. 主権主語運動の展開」の「2. 日帝の侵略と義兵戦争」に日本が出ている。
5. 日帝強占期とは、韓国が日本の植民地支配を受けた1910年～1945年を指す。
6. 教科書で使われる用語に関しては、第7次教育課程の国史教科書の日韓交流記述について、1)日韓関係の記述の比重が増加し、2)日本に影響を与えたとする表現が緩和されたとの報告がある(禹仁秀 2004)。
7. 性理学は宋学の別名、宋代に確立した儒学である。陰陽五行や老荘の学、仏教の哲理を取り込んで儒学を体系づけて近世東アジア思想に影響を及ぼした。
8. 加賀美(2008)では9分割統合絵画法を用いているが、列島の全体像や国旗、着物などが多く描かれていた。形容詞や名詞が出やすい自由記述法(玄大松 2005)と具体的な事物が描かれやすい描画という方法の違いが反映されたのではないかと解釈できる。

参考文献

- 青野正明 (2004)「韓国『国史』教科書に見る近代日本」『日本史研究』通号 497 日本史研究会 4-12.
- 石渡延男、(2002)「韓国—民族主義史観に依拠した歴史」『世界の歴史教科書—11 カ国の比較研究』石渡延男・越田稔編著 明石書店 17-42.
- 磯崎典世(1997)「韓国ジャーナリズムの日本像」『日本イメージの交錯』東京大学出版会 22-44.
- 岩男寿美子、萩原滋(1982)「韓国人大学生の日本イメージ」『慶応義塾大学新聞研究所年報』通号 18 慶応義塾大学新聞研究所 23-35.
- 伊藤陽一(1987)「世界の歴史教科書に見られる自国イメージと他国イメージ:韓国、中国、日本の場合を中心に」『世界は日本をどう見ているか—日本イメージの研究』日本評論者 編著辻村明 168-186.
- 禹仁秀(2004)「韓国『高等学校国史』教科書における韓日交流記述の特徴と変化」『大手前大学社会文化学部論集』4 199-209.

加賀美常美代(2007)『多文化社会の葛藤解決と教育価値観』ナカニシヤ出版

加賀美常美代、守谷智美、岩井朝乃、朴志仙、沈貞美(2008)「韓国における小・中・高・大学生の日本イメージの形成過程—9 分割統合絵画法による分析から」『異文化間教育』27 号(印刷中)異文化間教育学会

君島和彦(2002)「韓歴史共通教材の現状と今後」『歴史評論』632 40-53.

君島 和彦(2003)「韓国における第七次教育課程「国史」教科書分析」『史海』Vol.50 東京学芸大学 46-59

国史編纂委員会(1996)『中学校国史』上巻、教育部

国史編纂委員会(1997)『中学校国史』下巻、教育部

石渡延男、三橋広夫訳(2001)『入門韓国の歴史:国定韓国中学校国史教科書』明石書店

国史編纂委員会(2002)『中学校国史』教育人的資源部

三橋広夫訳(2005)『韓国の中学校歴史教科書—中学校国定国史』明石書店

国史編纂委員会(1996)『高等学校国史』上巻、教育部

国史編纂委員会(1997)『高等学校国史』下巻、教育部

大槻健、君島和彦、申奎燮訳(2000)『韓国の歴史:国定韓国高等学校歴史教科書』明石書店

国史編纂委員会(2002)『高等学校国史』教育人的資源部

三橋広夫訳(2006)『韓国の高校歴史教科書:高等学校国定国史』明石書店

玄大松(2005)「韓国人の血・地・知、そして日本--韓国人のアイデンティティ・独島意識・日本イメージに関する実証分析」『東洋文化研究紀要』Vol.148 東京大学東洋文化研究所 75-141.

玄明詰(2000)「高校国史教科書の近世韓日関係史叙述」『日本と韓国の歴史教科書を読む視点』歴史教育研究会編 梨の木舎 195-203.

高本亨(1995)「韓国の自国史教科書—民族の誇り」『歴史はどう教えられているか—教科書の国際比較から』中村哲 日本放送出版協会 122-133.

鄭在貞(1992)「二一世紀の歴史教育のための提言—韓国史教育を中心に—」『自国史を越えた歴史教育』西川正雄編 三省堂

鄭在貞(1997)「韓国教科書の日本像」『日本イメージの交錯』東京大学出版会 6-21.

鄭在貞(1998a)「韓国の歴史教育にみる日本—『国史』教

科書に日本はどう書かれているか」『韓国と日本—歴史教育の思想』鄭在貞 113-134.

鄭在貞(2002)「韓国の一種(「国定」)教科書はいま」『歴史評論』No.632 校倉書房 26-39.

鄭大均(1997)『日本(イルボン)のイメージ—韓国人の日本観』中央公論社

中村哲(1995)『歴史はどう教えられているか:教科書の国際比較から』日本放送出版協会

中村哲(2004)『東アジアの歴史教科書はどう書かれているか:日・中・韓・台の歴史教科書の比較から』日本評論社

朴ソプ(2004)「韓国」『東アジアの歴史教科書はどう書かれているか:日・中・韓・台の歴史教科書の比較から』中村哲編著 日本評論社 79-92.

朴振東(2000)「韓国高校生の目で見た歴史教科書」『日本と韓国の歴史教科書を読む視点』歴史教育研究会編 梨の木舎 261-270.

日韓相互理解研究会(1992)『日韓相互理解アンケート調査集計結果報告書』

尹世哲(1992)「韓国の歴史教育」『自国史を越えた歴史教育』西川正雄編 三省堂 60-73.

李宇泰(2000)「中・高等学校国史では古代韓日関係史をどう記述しているか」『日本と韓国の歴史教科書を読む視点』歴史教育研究会編、梨の木舎 98-107.

渡辺良智(1987)「外国の歴史教科書に見る日本のイメージ」『世界は日本をどう見ているか:日本イメージの研究』編著辻村明 日本評論社 145-167.

独立行政法人日本学生支援機構(2007)『留学生受け入れの概況(平成 19 年度)』

国際観光振興機構(2007)『訪日外客数・出国日本人数(2006 年確定値)』

読売新聞 1995 年 5 月 23 日付朝刊『アジア 7 개국世論調査』

読売新聞 2005 年 6 月 10 日付朝刊『読売新聞社・韓国日報社日韓共同世論調査』

読売新聞 2006 年 9 月 4 日・10 日付朝刊『アジア 7 개국世論調査』

출입국・외국인 정책본부(2007)『체류외국인 현황』

鄭在貞(1998b)『韓國의 論理—전환기의 역사교육과 일본인식』玄音社

いわい あさの／お茶の水女子大学大学院 国際日本学専攻
asano-iwai@msc.biglobe.ne.jp

ぱく ちそん／お茶の水女子大学大学院 国際日本学専攻
pakjisun@hotmail.com

かがみ とみよ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
kagami.tomiyo@ocha.ac.jp

もりや ともみ／お茶の水女子大学 教育研究特設センター
moriya.tomomi@ocha.ac.jp

稿末資料。韓国の中学・高校における歴史教科教育課程の変遷

教育課程	級別	科目	選択	単位	教科書	特記事項
1次 (1954－1963)	中	国史	必修	4単位	検定	統一課題の認識、民族文化継承 社会生活科に含む(公民、地理、歴史) 科目名は「わが国の歴史」)
	高	国史	必修	3単位	検定	文化を中心に学習
		世界史	選択	4単位	検定	現代世界理解を強調
2次 (1963－1973)	中	国史	必修	6－8単位	検定	愛国精神涵養 社会科の社会2に世界史と混合 (1969年部分改正—国史と世界史に分離)
	高	国史	必修	4単位	検定	生活中心の教育課程
		世界史	必修	6単位	検定	共通必修科目に編成
3次 (1973－1981)	中	国史	必修	4単位	国定	民族主体性・民族史の伝統・正統性強調 道徳科と国史科の新設 国史科の独立教科化—国史教育の強化
	高	国史	必修	6単位	国定	国民倫理科新設、国史科独立
		世界史	選択	6単位	国定	必修選択
4次 (1981－1987)	中	国史	必修	8単位	国定	民族主体性、伝統性強調、民族文化発展 近代史と現代史比重を高め、中高校の系列 性を勘案する
	高	国史	必修	6単位	国定	人間中心的性格を加味
		世界史	必修	8単位	検定	
5次 (1987－1992)	中	国史	必修	8単位	国定	民族の正統性、新しい歴史の想像 政治史を強調、学問的成果を積極的に反映
	高	国史	必修	6単位	国定	情報化社会に対応
		世界史	選択	6単位	検定	自然課程の課程選択に含む 修学能力試験にも出題
6次 (1992－1997)	中	国史	必修	8単位	国定	自主的、創意的人間の養成
	高	国史	必修	6単位	国定	
		世界史	選択	6単位	検定	修能試験人文系選択のうちの1(選択小数)
7次 (1997－)	中	国史	必修	6単位	国定	社会科の中に含む
	高	国史	必修	4単位	国定	前近代社会を中心に叙述、従来の2冊が 1冊になる
		近現代史	選択	8単位	検定	開港以後の時期の叙述、はじめて登場
		世界史	選択	8単位	検定	

注 1)本表は青野正明「韓国『国史』教科書に見る近代日本」『日本史研究』通号 497 日本史研究会 p12 より抜粋した。
注 2)1 単位は週 1 コマ(中学校は 45 分、高校は 50 分)の授業を 1 学期間(7 週)学ぶことを基準とする。7 次の高校「国史」
の場合、週 2 コマの授業を 1 年間学ぶので、4 単位となる。

Images of Japan in Korean History Textbook and Korean Students' Perspective

IWAI Asano・PARK Jisun・KAGAMI Tomiyo・MORIYA Tomomi

Abstract

Images of Japan in Korean history text book found by past researches and Korean students' perspectives on Japan were comparatively considered in this study. Followings are four results emerged from the study. 1) characteristics of images of Japan in Korean text book are mainly classifies into two as “Invader” or “Country that is Culturally inferior to Korea”, 2) Korean students' perspectives on Japan are ambivalent; there are mixture of positive, negative, neutral images and past and present image of Japan, 3) Japan's negative images engraved in perspectives of Korean students have a commonality with its image as ‘Invader’ depicted in Korean history text books. 4) Positive and neutral images of Japan arise either from Japan's modern images or her permanent qualities.

【Keywords】 South Korea, Korean history text book, Images of Japan, Korean students

(IWAI, PARK: Graduate School of Ochanomizu University; KAGAMI, MORIYA; Ochanomizu University)